

アウグスティヌスにおける信仰と 知解についての一考察

—*De Trinitate* I₁₋₄ を中心として—

中 澤 宣 夫

アウグスティヌスは信仰と知解の問題について語る時、多くの著作でイザヤ書 7・9 の言葉を七十人訳ギリシア語聖書 (Septuaginta) に基づくラテン語訳 *Nisi credideritis, non intellegitis* で引用している⁽¹⁾。しかし三位一体なる秘義の真理 (信仰) の知解を主要なテーマとなす『三位一体論』には *Nisi credideritis, non intellegitis* の直接的な引用は意外に少なく、その前半末尾の第七卷十二と後半の第十五卷二の二箇所止まる。勿論、他の箇所でもその引用語句に関連し、又それに基づくパラフレーズ的な表現は多く見られる。

さて、この *Nisi credideritis, non intellegitis* はアウグスティヌスの場合、神の永遠の真理に関しては *credere* が *intellegere* に先行しなければならないことを意味するのは当然である⁽²⁾。そして「至難の危険な問題」を十分に自覚しつつも聖書の言葉をとおして信じられた事を理性の明るみに齎す (知解する) 試みの偉大な成果の一つが『三位一体論』であった。

三位一体に関する問題に言及する或る書翰の中で、信仰によってのみ真理は捉えられるとして理性の介入する場所を拒絶しようとする年若い友人に対して知解力の重要な意義を次のように解明している。『扱て、聖三位一体の問題、即ち神性の統一性と各ペルソナの区別についての問題を私が注意深く慎重に考究して、その結果あなたが言うように私の明澄なる教えと能力があなた方の精神の雲を吹き払い、今はあなたが思惟し得ないこと

を知解の光によって明らかにし、心の眼で幾らかでも観得るようにすることを求められるなら、先ず、このあなたの求めが、真理は理性によってよりも信仰によって捉えられるべきであるとする御自分の先に提示した定義に合致するかどうか考えられよ。……若し、あなたが信じることを知解し得るように私にか、あるいは或る教師に理に適って尋ねるのであるなら、あなたの先の定義を訂正せよ。それは、あなたが信仰の価値を貶すためではなく、堅固な信仰によって (*fidei firmitate*) すでに保持しているものを理性の光によっても認め得るためです。

神が私たちの中に存在し、私たちをそれによって他の生きものよりも卓越せるものとして創造されたもの〔理性〕を嫌悪されたという考えを取去りなさい。私は言う、私たちが私たちの信仰の理性的根拠を受取り、また問い求めないと思ってはならない。それは私たちが理性的な魂を持たないなら、信じることも出来ないからである。だから、理性によって未だ明らかに知り得ないが、いつかは出来るであろう救いに有効な知識 (*doctrina salutaris*) に属する事柄において信仰——これによって心は清められ、その結果偉大な理性の光を捉え、それに到達するのである——は理性に先行するということは確かに理性に属している。従って預言者は、信ぜざれば知解せず、と言ったのである。その言葉において預言者は信仰と理性を区別し、そして私たちが信じることを知解し得るために先ず信ずべきであるという助言を与えたのである。従って信仰は理性に先行するということは理に適って (*rationabiliter*) 考えられた。実に、若しこの戒しめが理に適っていないなら、それは不合理なこと (*irrationabile*) である。これは拒否せよ。それ故に未だ捉えられ得ない偉大な真理 (*magna quaedam*) に関しては信仰は理性に先行すべきであることが理に適っているなら、疑いなくまたこのことを説得する幾らかの理性は信仰の前にある⁽³⁾』

ところで信仰と知解に関する命題の定式だけを考えるなら、知解せんがために信ぜよ、とは逆に信ぜんがために知解せよ、という命題がいくつか

彼の著作に見出されるのも事実である。例えば、「イザヤ書 7・9 *Nisi credideritis, non intellegetis* について」の『説教⁽⁴⁾』で、『私は信ぜんがために知解したい、と君は語り、私は、君が知解せんがために信ぜよ、と語る』と言う対立的な命題を承認し、それに関しては *Nisi credideritis, non intellegetis* という預言者の言葉に解答を見出すが、更に『我は信ぜんがために知解したい』という命題の持つ意味を次のように考える。そのように語る人も何かを語っている。それは信じる心、或いは信じたい気持を語っている。実に『信仰が彼らを聴くように導いた。信仰は彼らを神の言葉の前に居合わせた。しかし生れた信仰そのものは水注がれ、育まれ、強められなければならない。……私たちは語り、勧め、教え、説得しつつ植え、水注ぐことは出来るが、成長を与えることは出来ない。』続いて、『実に私が語るのは未だ信じていない人々が信ぜんがためであり、私が語ることを知解しないなら、彼らは信じ得ない。だから、或る面で、私は信ぜんがために知解したいと彼が言うのは真実である。そして私は、預言者が語るように、君は知解せんがために信ぜよ、と言う。つまり、私たちは真実を語り、一致している。』とすら叙べる。そして先の二つの命題を統一的に理解しようとして、アウグスティヌスは簡潔に *Intellege, ut credas, verbum meum; crede, ut intellegas, verbum Dei* と定式化する。

更に私たちが信仰と知解の問題を考える際に重要だと思われるテキストを引用しよう。それは *Da mihi intellectum* を廻って展開される『詩篇講解⁽⁵⁾』の思索である。『幾らか知解しないなら、誰も神を信じることは出来ない。然も信ぜしむる信仰はより豊かなものを知解するために健やかにされる。というのは私たちが知解するに非ざれば信じない事と私たちが信じるに非ざれば知解しない事は別であるから。実に信仰は聴くことから存在し、聴くことはキリストの言葉 (*verbum*) によって存在する。宣教者が語る言葉そのもの (*lingua ipsa*) を知解しない人はいかにして信仰を宣べる人を信じようか。しかしまた私たちが前以て信じるに非ざれば知解し得

ない或るものが存在するからこそ預言者は、信ぜざれば知解せず、と語る
のである。だから私たちの知解力は信じるものを知解するのに有効であり、
そして信仰は知解するものを信じるのに有効である。』

以上の如く引用したテキストなどからも認められるように、アウグステ
ィヌスの場合、信仰と知解、或は信仰と理性の問題を考察するために聖書
の言葉を如何に読み理解すべきか、という言葉についての解釈学的な視点
を設定しなければならないように思われる。

二

夫故、この視点に立って『三位一体論』⁽⁶⁾全体の所謂序説に当たる部分の
数節について若干の考察を試みたい。

アウグスティヌスは神の三位一体という秘義的な信仰の真理について論
考を進めるに際して先ず読者に次の如き注意を喚起する。 *Lecturus haec
quae de Trinitate disserimus, prius oportet ut noverit stilum nostrum
adversus eorum vigilare calumnias, qui fidei contemnentes initium, im-
mature et perverso rationis amore falluntur.*

この冒頭の数行に著者は三位一体についての論考という最も危険な問題⁽⁷⁾
を含む思索の基本的姿勢の殆ど全てを示していると言い得るかも知れない。
彼の思索の筆は或る人々の神に関する誤った意見を監視することに向けら
れる。その人々の誤謬の原因と条件を鋭く衝いて、「信仰のはじめ *initium
fidei* を軽蔑し、従って理性への未成熟にして道外れの愛によって欺かれ
る」と言う。*initium fidei* を価値の無いものとして、理性への固執に急ぐ
ことが誤謬の原因であると言われる。それでは、この *initium fidei* とは何
であろうか。精確に規定することはむづかしい。先ず考えられるのは、信
仰という始め、原理である。即ち認識とか知解の如き理性活動の始め・原
理を意味するであろうか。そのような意味で直ちに想起され、参照箇所と
して引用されるのは、本書では『かくしてもし彼らが神に対していくらか

の愛か畏れを懐くなら、聖なる教会に信仰者の医薬が健全に用意されているのを見て、あの信仰の原理と秩序に立ち還って欲しい』 *ad initium fidei et ordinem rediant* ⁽⁸⁾ と『しかし、信仰から発出す志向こそ正しいのである。なぜなら、確実な信仰は或る仕方で認識の基礎であるから。』 *Sed ea recta intentio est, quae proficiscitur a fide. Certa enim fides utcumque inchoat cognitionem* ⁽⁹⁾ である。また『詩篇講解』で御子と御父の等しさという偉大な真理に関して『魂が強められるまではそれを看護る信仰の原理が存在する。……魂は知解が可能である前は信仰において生まれ、そして神が与えたまう限り知解するように努める』 *et est initium fidei, quod custodit animam donec roboretur. Lacte nutritur ut perveniat ad habitudinem et firmitatem cibi solidioris. Antequam hoc possit, nutritur in fide: et conatur intellegere, ut intellegat quantum Deus dederit.* ⁽¹⁰⁾ と語られている箇所も参照出来ようか。

しかしまた *initium* の、「始める」、「創める」を意味する動詞 *initio* を考慮するなら、*initium fidei* は信仰を創めるものとして原義に即して理解される *auctoritas* を示唆しないであろうか。この点について『真の宗教について』 ⁽¹¹⁾ にある『権威は信仰を要請し（促し）、そして人間を理性に備える』 *auctoritas fidem flagitat, et rationi praeparet hominem, ratio ad intellectum cognitionemque perducit.* は参考になる。このように考えるとアウグスティヌスの場合、信仰の問題は *auctoritas* の問題に相即することをすでに理解出来るように思う。

孰れにしても、*initium fidei* を軽蔑することは必然的に理性を正しく使用し得ないことに通ずるとアウグスティヌスは語っている。その場合、理性への愛を *immaturus* と *perversus* という二つの形容詞で規定しているのは注目すべきことである。即ち、前者は、未成熟な・時機尚早の・季節前の、というように植物の成長と結実に関連する語であり、後者は、道を外れた・転倒した、というように目的とか方向に関連する語である。理性

に対する未成熟で道外れの愛によって欺かれ、誤謬に陥るといっているのである。理性は信仰を喚起する聖書の言葉に基づいて初めてその本来の機能を発揮し、豊かな結実（成果）をもたらすことが出来るとアウグスティヌスは考えているようである。私たちは『三位一体論』開巻冒頭の数行に籠められている著者の深い思念を丁寧に読み取らなければならない。彼はつづいて誤謬に陥っている人々を次のような三つの基本的な範疇において指示する。第一種類の誤謬は物的なもの（corpus）に拠って神について考えるものであり、第二種類の誤謬は魂（anima）のような *creatura spiritualis* に拠って神について考えるものである。これらの誤謬はいずれも「白色・赤色」にせよ、「忘却・想起」にせよ物体とか精神の中に「存在するもの」に基づくものである。しかし第三種類の誤謬は『神なる不可変的な存在へ眼ざしを向けるために可変的である被造物全体を超え出ようと努める』人々が考えるものであり、彼らは、物体にも霊的な被造物にも拠らないが神について誤ったことを考える。そして彼らが考えるものは『物体においても、霊的な被造物においても、また創造主御自身においても認められないという点で彼らは真理から一層遠去かっている』。この第三種類の誤謬が具体的にどのような考えを指すのか必ずしも定かではないが、「存在しないもの」に関係している点で「一層甚だしい誤謬」であるとされる。アウグスティヌスは神に関する誤謬の中でこの第三種類のものが最も危険であり、従ってそれに対して特に強い関心を寄せているように思う。丁度、彼の聖書解釈学の主著である『キリスト⁽¹²⁾教学』の序において前以て予想される三つのグループの批判者に備えて、自己の聖書解釈の立脚点を明らかにする際に、第三のグループの批判者に大半の部分を割いて応答するのに対応するようである。彼らは徴しの意義や聖書解釈のための規則を知りつつも『ものは徴しをと⁽¹³⁾おして学知される』*res per signa* という解釈学の認識論的な原理を誤解して直接的に「神の賜物によって」*munere divino* 聖書の音信を知り得ると誇示しようとする。アウグスティヌスはこの人々の基本

的な姿勢について『彼らは神の賜物を誇り、私が今与えようと意図した解釈の規則なくして聖書を理解し解釈するのを喜ぶ』*divino munere exultant et sine talibus praeceptis, qualia nunc tradere institui, se sanctos libros intellegere atque tractare gloriantur* と規定し、さらに彼らは「人間の教示なくして聖書を知ることを喜ぶ」*sine duce homine nosse gaudent* と語り、そして『しかし人間をとおして *per hominem* 学ぶべきことは高ぶりなくして学ぶがよい』と聖書解釈と *superbia* の問題に触れているのは注目すべきである。

『三位一体論』のテキストに戻ろう。その箇所でも、第三種類の誤謬について『しかし彼らは可死性の重みに抑えつけられているので、知らないことを知っていると思われようと欲し、彼らが知ろうとすることを知り得ないとき、自分たちの意見の先取り (*praesumptiones opinionum suarum*) を一層厚かましくも断定することによって、自分で知解の道を閉ざし、自分たちが主張する意見を放棄せず、むしろその間違った考えを訂正しまいと語る』と語り、そのような神についての誤謬が *superbia* に基づくことを明らかにしている。

第二節で以上の如き誤謬即ち病いからの解放乃至癒しの方途が語られる。『人間の精神がこの類いの誤謬から浄められるために、未熟な者たちと歩む聖書は如何なる種類の事物の言葉をも避けなかった。これらの言葉から私たちの知解力はいわば養われたもののごとく段階を登るようにして神的なもの、至高なものへ立ち上がる。』ここで誤謬(病い)から解放されるべきものは人間の *animus* である。浄める *purgare* という語は癒す、治療する、という意味を持つ。そしてこの癒しのために聖書は凡ゆる種類の事物即ち存在者の徴し *signum* としての言葉 *verbum* を用いると言うのである。聖書について *parvulis congruens* と規定されることに注意しよう。これはアウグスティヌスの聖書に対する考え方を示唆する表現である。そしてそれは先ず文体的に見ても、若き修辞学徒たりし彼が *superbia* に

よって聖書から拒絶され、その内実を理解し得なかった苦い経験を回想している次の如き『告白』の一節を彷彿させる。Tumor enim meus refugiebat modum eius et acies non penetrabat interiora eius. Verumtamen illa erat, quae cresceret cum parvulis, sed ego dedignabar esse parvulus et turgidus fastu mihi grandis videbar.⁽¹⁴⁾ 聖書に対してこの箇所では parvulus と共に、成長する、現れ出る、可視的になるという意味を持つ crescere という語が用いられ、『三位一体論』では parvulus に相応しい、或いは共に歩むとも訳し得るような congruere という語が用いられる。孰れにしても、知らないのに知っていると思ひ做すことをせず、むしろ自らの無知を知る謙虚な者にとって聖書は真理への導き手である。聖書と humilitas の問題がここで示唆されているように思う。⁽¹⁵⁾ 因みにこのような考え方に関連して、『真の宗教について』は参照すべきであろう。聖書の学びは空しき好奇心の医薬であるとして次のように語られる。『聖書の考察と解釈によって私たちは精神 animus に食物と飲物を与えるべきである。……この真に自由人に適しく高貴な学校 ludus でこそ私たちは健やかに教育されなければならない』⁽¹⁶⁾

さて、先に引用した『三位一体論』のテキストで sancta Scriptura parvulis congruens は人間の精神の誤謬（病い）を癒すために「言葉」を用いると言われる。精神が「理性への未成熟な道外れの愛」によって欺かれないためには「言葉」が必要であるといっているようである。そして「言葉」を起点にして私たちの intellectus は divina atque sublimia に向って gradatim に養育されて病いから立ち上って行くと言う。だから、聖書は神について語るとき、例えば『あなたの翼の蔭で私を守りたまえ』⁽¹⁷⁾ のように物的なもの res corporalis から採られた言葉を用い、また、例えば『私は嫉む神である』⁽¹⁸⁾、『私は人間を創ったことを悔いる』⁽¹⁹⁾ のように靈的な被造物 creatura spiritualis から採られた言葉を用いるのである。しかし聖書は全く存在しないもの res quae omnino non sunt からの言葉を用い

ない。要するに聖書は物的なものであれ、霊的・精神的なものであれ、存在者の徴し *signum* としての言葉 *verbum* を用いる。従って、第三種類の誤謬によって『真理 *veritas* から閉めだされる人々は、一層危険で、より空しく滅び去る』と言われる。彼らは『神について、神御自身においても、いかなる被造物においても見出され得ないことを勝手に考える』から。従って再び『聖書はよく被造物において見出されるものによって、いわば幼子にふさわしいたのしみをかたちづくり、それによって弱きものの情態を、その分限にしたがって、あたかも一步一步より高いものを問い求め、より低いものを捨て去るように促す』と、時間的なものから永遠的なものへ弱い精神を動かす聖書の言葉の効用が主張される。

ところで、誤謬(病い)から癒されるべき人間の精神を指示するとき、アウグスティヌスが *animus* という語を用いて、類似語の *cor* 或いは *mens* という語を用いていないのは注目すべきことかと思う。例えば『山上の説教講解』⁽²⁰⁾で、浄福への道を段階的に語る時、魂 *anima* が神的権威 *divina auctoritas* に服し畏れる謙虚 *humilitas*・敬虔によって柔和になるべき聖書の認識 *cognitio*・自己の現状についての知識 *scientia* の段階を経て第四段階で労苦 *labor* が精神 *animus* との関係で次のように提示される。『其処で精神は危険な甘美によって結びつけられていたものから引き離されるために烈しく苦しめられる』と。また『キリスト教学』⁽²¹⁾でも『神の意思 *voluntas* を知るために神への恐れによって向きを変えられることが就中肝要である』として最高の段階である知慧への道が『山上の説教講解』の先に引用した箇所と殆どパラレルに語られる。『畏れと敬虔という二つの段階を経て知識 *scientia* という第三の段階に来る。実にこの段階で、聖書を学ぶ人はみな自己を習練し、聖書においてこそ神のために神を、また神のために隣人を愛すべきことを見出す。……従って先ず聖書においてこの世の、言換えると時間的な事物への愛によって絡まされて、神への全き愛と聖書が指示する限りでの隣人への全き愛から遠く引き離されている自己を

見出さなければならぬ。』と語り、さらにこの段階を経て義を渴望する勇氣 *fortitudo* という第四段階に到達し、そこから移ろい行く事物のなべての死に至る喜悅から身を退き、ひるがえって永遠なるものの愛、不可變的な三位一体へ回心することを示している。そして *fortitudo* は *animus* の *vir* に他ならないであろう。『反マニ教徒創世記註解⁽²²⁾』においても地において労働(苦)する人は雲からの真理の雨水即ち人間(預言者や使徒)の言葉からの神的な教えを必要とすることが語られ、聖書解釈は茨と薊が繁る地を額に汗して耕す労働にも比せられている。従って、先に引用されたように誤謬(病い)から先ず癒されなければならないものは *animus* であると言っているように思う。それはいわば解釈する人間の主体を指示する語であろうか。誤謬(病い)に陥り易い精神が聖書の言葉によって浄められ癒されるとき、知解力が「神的なもの、崇高なるもの」へ上昇するという。だから聖書の言葉の解釈と理解が、知解にとって重要な意義を持つのであろうか。

第三節では神独自の不可死性と不可變性の叙述の後、神の実体を直視し十全に知ること *intueri et plene nosse* は困難である故に精神の浄め *purgatio mentis* が必要であると言う。つまり此处では先の *animus* と異なり、神を觀、知る主体として *mens* が用いられている。*mens* は人間の魂 *anima* のいわば頭・顔・眼であり、最高の精神的な機能を持っている。この浄められた精神によって『言表わし得ないものが言表わし得ない仕方で見られ得る』*illud ineffabile ineffabiliter videri possit* のであるが、*mens* の浄めがなされるまで、私たちは信仰によって養われ、或る近づき易いものとおして習練される。

このように神に関する誤謬からの解放が論じられる場合には *animus* を用い、また困難な神の実体の認識を問題にする際には *mens* を用いるというようにアウグスティヌスは解釈学的な用語法を意識しているように思う。文体と思索の緊密性をとおして真理そのものに迫る彼の姿勢をこれらのテ

キストにおいても見ることは出来ないであろうか。

三

第四節の始めで『三位一体論』全体の基本的な構想を次のように力強く明らかにする。『このようなわけであるから、われらの主なる神の祐けを受けて、わが力の及ぶ限り、聖三位一体は唯一の真の神であること、また、父と子と聖霊は同一の実体あるいは本質であると正当にも語られ、信じられ、知解されることに対する根拠を提示したい』。ここには言葉と信仰と知解の内的な連関が問い求められている。三位一体について思索することは究極的には聖書をとおして語られた信仰の真理を読み明らかにすること *intellegere* であり、従って三位一体論考は聖書解釈論において正しく位置づけられると思う。だから、彼は続いて言う。『人間的な精神 *mens* の力弱き眼ざしは、もし信仰の義によって養われ強められるのでなければ、あれほどに高貴な光をたじろがずに凝視し得ない故に、自分の力によっては至高なる善を認め了解することは不可能である』と。

それ故、彼は先ず聖書の權威に拠って信仰の内容を明らかにし、次に信仰の知解をなすべきであるという三位一体論考の方法を提示し得る。

さて、『聖書の權威に拠って *secundum auctoritatem Scripturarum sanctarum*』教会の教義としての三位一体信仰の内実と根拠を明らかにすべきである、ということは何を意味するのであろうか。私自身今までに看過して来たこの權威という語の持つ重要な意義を少しく注目し考察して見た⁽²³⁾。『權威』と一応訳出される——差当って他に適当な語が見出されない故に——*auctoritas* は実に豊かな意味を含むようである。辞典によると *auctoritas* は *auctor* から由来する。*auctor* とは或る事物の存在を現出するもの、或はその増加、成果、繁栄を促進するもの、という原義から創造(始)する人、作る人、著作者、発見者、教える人、保護者などの意味を持つし、さらにその影響・助言・命令によって或る事が為されるその人、

即ち助言者・促す人・動かす人などの意味を持つ。従って *auctoritas* は産出、見解、判断、評価、助言、忠告、説得、勧め、慰め、力づけることなどの意味を持ち、さらに意思、命令、自由、力、範型、信頼出来ること、などの意味を持つ。要するに *auctoritas* は *auctor* の性格、意思、役割を示す語である。

元来ローマ思想の中心概念であった *auctoritas* は Tertullianus や Cyprianus を経て、アウグスティヌスのキリスト教的思索において見事な転位・転釈の成果を持つに到ったようである。彼の著作全体においてはこの語は約千二百回を数えられる由である。そしてそれはアウグスティヌスの場合、類似概念である「職務の権能・権力 *potestas*」と区別して用いられ、自らのうちに影響力・作用力の根拠を持つ人格的なものを意味するようである。

私たちが今取扱っているテキストに関連して『三位一体論』を見るなら、*auctoritas* は約二十四回用いられているのに気づく⁽²⁴⁾。そしてその大部分は前半即ち聖書の言葉についての解釈を三位一体信仰を明らかにするために試みる箇所——第七巻まで——に用いられているのは注目すべきことであろう。『聖書の権威に拠って』信仰の真理を明らかにするためにアウグスティヌスは近代人にとってはやや煩雑すぎるとさえ思われるほどに聖書の言葉の解釈を精細且つ丹念に遂行しているのは理由なきことではない。聖書の言葉の *auctoritas* をアウグスティヌスは十分に自覚している。『三位一体論』において聖書の *auctoritas* に直接的に言及している箇所は以下の通りである。第一巻四 *Sed primum secundum auctoritatem Scripturarum sanctarum, utrum ita se fides habeat, demonstrandum est.* 第一巻六 *quandoquidem nec ipsis sanctis divinatorum Librorum auctoritatibus ullo modo quisquam recte tribuerit tam multos et varios errores haereticorum;* 第三巻五 *quid horum tamen ex divinarum Scripturarum auctoritatibus credam, nunc non opus est dicere, 同上十二 vel ad admonendos fideles,*

ne tale aliquid facere pro magno desiderant, propter quod etiam nobis Scripturae auctoritate sunt prodita; vel ad exercendam, probandam, manifestandamque justorum patientiam. 同上二十二 Exstat enim auctoritas divinarum Scripturarum, unde mens nostra deviare non debet, nec relicto solidamento divini eloquii per suspicionum suarum abrupta praecipitari, 同上二十六 Quid hoc evidentius? quid tanta auctoritate robustius? 同上二十七 et firmitate auctoritatis quantum de Scripturis sanctis divina eloquia patuerunt, quod antiquis patribus nostris ante incarnationem Salvatoris, 第九卷一 et validissimae auctoritati Scripturae dicentis, 《Deus charitas est》: 第十二卷十九 divina tradit auctoritas. 第十三卷十二 sed divina auctoritate promittit. 第十五卷一 Quae utrum sit Trinitas, non solum credentibus, divinae Scripturae auctoritate; verum etiam intelligentibus, aliqua, si possumus, ratione iam demonstrare debemus.

以上のテキストの中でさらに auctoritas の意味内容に言及されているのは第三卷二十二, 二十六, 二十七, 第九卷一である。それらの箇所では auctoritas を規定する語である solidamentum, firmitas, validus, robustus は人間の弱さ, 病いを表示する infirmitas, imbecillitas という語に対応する。実に聖書の auctoritas が人間の弱さを癒し強める, という考えはアウグスティヌスの聖書に対する関わり方を知る上で大変示唆に富んでいるように思う。この点については、「天空」を人間の弱さを覆い保護する聖書の auctoritas として寓喩的解釈をする『告白』の『しかし、われらの神よ。あなたの神的な書において、私たちのために、私たちの上に権威の天空 firmamentum auctoritatis をお造りになったのはあなた以外のだれだったでしょう。……じっさい、彼らによって宣べられたみことばのうちには確固たる権威 solidamentum auctoritatis がふくまれていましたが、その権威は彼らの死によって、地上にあるすべてのものの上に、崇高なすがたでゆきわたるようになりました。』⁽²⁵⁾、また、母モニカと共にアンブロシウスの

説教を聴問し心深く動かされ聖書の權威に眼を向けるようになった事を叙べている『このように私たちは、たんなる理性のみによっては真理を見いだすだけの力がなく (essemus infirmi ad inveniendam liquida ratione veritatem), だからこそ聖書の權威も必要となるわけですが、もしあなたが聖書によって信ぜられ、聖書をとおして探求されることをおのぞみにならなかつたならば、すでにすべての国々にあまねくゆきわたっているこのように卓越した權威を聖書に賦与したもうたことは決してなかつたであろうと、私は信じはじめたのです』⁽²⁶⁾を中心とする前後のテキスト、さらに『詩篇講解』第八十六篇四の⁽²⁷⁾、使徒や預言者の權威は私たちの弱さを担う、というテキストを参照し得よう。

creatura たる人間はいかにしても自らの auctor たり得ない定めを持つ故に、自らを敢えて自らの auctor たらしめようとするとき、転倒した仕方⁽²⁸⁾で Creator たる神をまねるという superbia に陥らざるを得ない。従って、この superbia を避けようとするなら人間は聖書において caro と成られた Verbum の auctoritas に頼り、そこにこそ己が生きるよすがを見出さなければならない。聖書の auctoritas は弱き人間を信仰へと促し、慰め、励ますものであると言えよう。

そこで先に引用したように、三位一体信仰の論考についての方法を提示する基本語である「聖書の權威に拠って」に考察を戻そう。secundum auctoritatem というように、auctoritas への一致、或いはむしろ auctoritas への服従が語られる。只管なる聖書の音信への聴従の姿勢が問い求めを内に含みつつ浮彫りにされる。そこには信仰の根拠を問い求めるアウグスティヌスの心の息づかいすら感じられるようである。語られ書かれた神の言葉なる聖書が何を語るのか、また何を語ろうとするのか、ということ謙虚に聴く姿勢が先ず需められる。つまりアウグスティヌスは聖書の著者 auctor の意思 auctoritas を言葉をとおして知ろうと努めるのである。このような意味における聖書の權威の問題は彼の聖書解釈の中心問題の一つ

であると思う。聖書を如何に読み積くかという聖書解釈のための労苦は畢竟聖書の権威を如何に受取るべきかということに関係する。

アウグスティヌスは神乃至キリストが神的な権威としての聖書の真の著者であることを確信していた。キリストこそ、『神の貌にて居給ひしが、神と等しくある事を固く保たんとは思はず、反って己を空しうし僕の貌をとりて人の如く』⁽³⁰⁾ なられた神的な権威そのもの、神の言であり、従って『私たちが外的なものから内的なものへと呼ぶために外的にも成られた内なる教師』⁽³¹⁾ である。同時にまたアウグスティヌスは聖書は人間の言葉というものの徴しをとおしてもものについて私たちに告知する書物と考えていた。だから、『キリスト教学』⁽³²⁾ で徴し *signum* に言及して、『それをつくる *significare*、即ち意味表示するのは、その *signum* を与える人が心に抱いているものを他者の心へ運び投げかけるために他ならない』と言う。従ってアウグスティヌスは『聖書に含められている神が与え給うた徴し *signa divinitus data* も、それらを共に書いた人々をとおして *per homines* 私たちに指示されている』⁽³³⁾ と言い得る。かくて、『人間の意志の多くの疾患を癒す聖書』を読む人々は『それを書いた人々の思念と意志を、そしてそれらをとおして神の意思をこそ——それによってこれらの人々が語ったと私たちは信じている——見出そうと欲した』⁽³⁴⁾ ののである。この神の意思が言葉をとおして籠められているものが聖書の権威に他ならない。従って、『神を畏れ、敬虔で柔和な人々はこの聖書全体において神の意思を問い求める』⁽³⁴⁾ ことが聖書を解釈する者の重要な課題となる。

以上のように権威は言葉をとおして言葉を廻って、聖書の告知する真理なるもの *res* を問い求めるように人間を促し励ますものである。即ちアウグスティヌスが屢々用いる *admonitio* としての機能を持っているようにも思う。*admonitio* とは人にものへの想起を喚び起こし、且つものへと心に向けるという意味を持っていないだろうか。*auctoritas* と *admonitio* が直接結合するテキストではないが、この問題を考察するために参照し得る

箇所として、回心直後の若きアウグスティヌスが *auctoritas* の重要な意義を指摘している『秩序論』の『偉大にして隠れたる真理を教えられんと欲するすべての人に対して、真理の戸を開くものは権威の外にありません』⁽³⁵⁾ という言葉と、また、同じ頃に書かれた『幸福な生活』の『さらに、私たちが神を思い渴望するように、私たちに勧める一種の警告 *admonitio* が、真理の源泉そのものから私たちのところに流れてきます。あの隠れた太陽は私たちの内面の目にこの閃光を注ぎます』⁽³⁶⁾ という瑞々しい言葉を引用しておこう。

さて、『聖書の権威に拠って』信仰の真理を明らかにするという方法は必然的に「より内的な方法で」*modo interiore*,⁽³⁷⁾ ものそのものである「至高の真理」に人間の精神 *mens* における三位一体の類比を思索の言葉によって辿りつつ、接近するという知解の道を拓く。しかしそれは言詮を絶する神の三位一体なる秘義について、語られ、信じられ、そして知解される、という基本的なモチーフを前提とする故に、聖書の言葉に基づく思索であるのは当然であると言わなければならない。知解の道は「内的にしてより鋭い理性によって」辿られるが、その精確な考察は精神の言葉の位相及び愛の位相への洞察を要請する。だが今はそれに対する備えを欠くので、信仰とは何か、知解とは何か、についてのより深められるべき実質的な考察と相俟って他の機会に譲ることにする。

四

終りに主題に関して若干補足的な考察をなしたい。アウグスティヌスは聖書の言葉、或は言葉の権威によって信仰が喚び起こされ、そして信仰は言葉をとおして私たちに問い求め *quaerere* と思索 *cogitare* を促す、と考えているように思う。『信仰は問い求め、知解は見出す』⁽³⁸⁾。より深く内的に真理を問い求め見出そうとする精神の眼ざしが知解の志向であろう。⁽³⁹⁾ アウ

グスティヌスは神の *veritas* を *res* の *signum* としての言葉 *verbum*⁽⁴⁰⁾ をとおして思索し観ることを究極的な目的とする。故国を目指して歩む順礼の旅路の悦びであり、乗物 *vehiculum*⁽⁴¹⁾ である言葉は必ずしも絶対的な意味での享受 *frui* の対象とはなり難いが、善く使用するなら、ものに至る確かな道であることをアウグスティヌスは知っていた。だから信仰の知解を志す人は時間的なものから採られた言葉の一葉をも看過しないで、そこに佇んで永遠の真理の消息を聴こうとしているようである。彼は勿論、『神は語られるよりも一層真実に思惟われ、そして思惟されるよりも一層真実に在し給う』⁽⁴²⁾ ことを自覚していた。

アウグスティヌスにとって信仰は絶えず聖書の言葉の権威によって点検し問われるものであり、そして信じつつ知解し、また知解しつつ信じ問い求めるというように信仰と知解は全体として内的に相即し関係しているように思う。

註

- (1) アウグスティヌスはこの所謂 *Itala* 聖書を次の理由で推奨している。Nam est verborum tenacior cum perspicuitate sententiae. (*De doctrina christiana*, II 22) *Vulgata* 聖書では *Si non credideritis, non permanebitis* とあり、*Septuaginta* 聖書では *καὶ ἐὰν μὴ πιστεύσητε, οὐδὲ μὴ συνήτε* とある。*De doctrina christiana* II 17 ではこの二つのラテン語訳について言及し、Ergo, quoniam intellectus in specie sempiterna est, fides vero in rerum temporalium quibusdam cunabulis quasi lacte alit parvulos; nunc autem per fidem ambulamus, non per speciem; nisi autem per fidem ambulaverimus, ad speciem pervenire non possumus, quae non transit, sed permanet per intellectum purgatum nobis coherentibus veritati. Propterea ille ait: Nisi credideritis, non permanebitis, ille autem: Nisi credideritis, non intellegetis. と興味深く語っている。
- (2) *De diversis quaestionibus LXXXIII*, 48 De credibilibus: Tertium, quae primo creduntur, et postea intelleguntur: qualia sunt ea quae de divinis rebus non possunt intellegi, nisi ab his qui mundo sunt corde; 参照。
- (3) *Epistulae* 120 (ad Consentium) 2, 3

- (4) *Sermones* 43, 7. 8
- (5) *Enarrationes in Psalmos* 118, *serm.* 18, 3
- (6) *De Trinitate* 1₁₋₇
- (7) *Epistulae* 143 (ad Marcellinum) 4
- (8) *De Trinitate* I₄
- (9) *ibid.* IX₁
- (10) *Enarrationes in Psalmos* 35, 1
- (11) *De vera religione* 24, 45
- (12) *De doctrina christiana*, prooemium 1-9
- (13) *ibid.* II₂: Omnis doctrina vel rerum est vel signorum, sed res per signa discutuntur.
- (14) *Confessiones* III₉
- (15) この点について次のテキストは参考になる。 *Enarrationes in Psalmos* 8, 8
Inclinavit ergo Scripturas Deus usque ad infantium et lactentium capacitatem, sicut in alio Psalmo canitur, Et inclinavit caelum, et descendit: et hoc fecit propter inimicos, qui per superbiam loquacitatis inimici crucis Christi, etiam cum aliqua vera dicunt, parvulis tamen et lactentibus prodesse non possunt.
- (16) *De vera religione* 51, 100
- (17) 『詩篇』 16, 8
- (18) 『出エジプト記』 20, 5
- (19) 『創世記』 6, 7
- (20) *De sermone Domini in monte secundum Matthaeum* I₁₀
- (21) *De doctrina christiana* II₉
- (22) *De Genesi contra Manichaeos* II₉ 30
- (23) アウグスティヌスの思想における *auctoritas* の重要な意義については Karl-Heinrich Lütcke *Auctoritas bei Augustin* 1968 から多くの示唆を新たに与えられた。
- (24) 因みに粗雑な調べ方ではあるが、アウグスティヌスの二、三の著作を見ると、*De vera religione* では *genus humanum ad tam salubrem fidem summo amore atque auctoritate converteret* (3); *ex quo illa omnia, quae primo credimus nihil nisi auctoritatem secuti*, (14); *Tribuitur enim in auctoritatem atque rationem. Auctoritas fidem flagitat et rationi praeparet hominem.* (45) など十回、*De doctrina christiana* では *titubabit autem fides, si divinarum scripturarum vacillat auctoritas* (I₄₁); *In canonicis autem scripturis, ecclesiarum catholicarum quam plurimum auctoritatem sequatur*, (II₁₂); *si animum eorum iam verbi vinxit*

auctoritas, (III₁₅) など十六回, *De utilitate credendi* では Quod intellegimus igitur, debemus rationi: quod credimus, auctoritati, quod opinamur, errori. (25); invenimus primum beatorum genus ipsi veritati credere: secundum autem studiosorum amatorumque veritatis, auctoritati (25); sed si diligenter considerent plurimum interesse, utrum se scire quis putet, an quod nescire se intellegit credat aliqua auctoritate commotus (25); Haec est, crede, saluberrima auctoritas, haec prius mentis nostrae a terrena inhabitatione suspensio, haec in Deum verum ab hujus mundi amore conversio. Sola est auctoritas, quae commovet stultos ut ad sapientiam festinent. (34) など二十六回, その他 *De ordine* では十回, *Contra Academicos* では十回, *De beata vita* では三回, *De magistro* では五回用いられている。

- (25) *Confessiones* XIII₁₆ (山田訳に由る)
- (26) *Confessiones* VI₈ (山田訳に由る)
- (27) *Enarrationes in Psalmos* 86, 4: Fundamenta ejus in montibus sanctis, diligit Dominus portas Sion. Jam ideo praelocutus sum, ne putetis alia esse fundamenta, alia portas. Quare sunt fundamenta Apostoli et Prophetae? Quia eorum auctoritas portat infirmitatem nostram. Quare sunt portae? Quia per ipsos intramus ad regnum Dei: praedicant enim nobis. Et cum per ipsos intramus, per Christum intramus. Ipse est enim janua.
- (28) *Contra Faustum* XXXII, c. 19. 参照
- (29) 神が聖書の著者であることを示すテキストとして少くとも次の二つを直ちに挙げ得る。*Enarrationes in Psalmos* 73, 2: ideo Deus ostendens se esse utriusque creatorem, etiam utriusque Testamenti se esse voluit auctorem; *Contra Adimantum Manichaeum* 7, 5:, utrumque Testamentum convenire atque congruere, tamquam ab uno Deo utrumque conscriptum.
- (30) ピリピ書2, 6—7
- (31) *Contra epistolam Manichaei* c. 36, 41
- (32) *De doctrina christiana* II₃
- (33) *ibid.* 6
- (34) *ibid.* 14
- (35) *De ordine* II₂₆ (高橋訳に由る)
- (36) *De beata vita* 35 (渡辺訳に由る)
- (37) *De Trinitate* VIII₁
- (38) *ibid.* XV₂
- (39) *Enarrationes in Psalmos* 22, *Serm.* 2, 22 参照

- (40) *De magistro* 46 における Adeodatus の次の言葉は言葉の価値と限界について見事に指摘していると思う。Ego vero didici admonitione verborum tuorum, nihil aliud verbis quam admoneri hominem ut discat, et perparum esse quod per locutionem aliquanta cogitatio loquentis apparet: utrum autem vera dicantur, eum docere solum, qui se intus habitare, cum foris loqueretur, admonuit;
- (41) *De doctrina christiana* I₃₉
- (42) *De Trinitate* VII₁